第4章　ジャナ・バハにおける日常供養

1．序

インドとチベットという二つの文化圏の間にはさまれたネパールは，両者から大きな影響を受けてきた。特にカトマンドゥ盆地を中心に，ネワール族の間で信奉されているネワール仏教にはインドからの影響が強くみられる。今日のネワール仏教の原型は，13世紀から18世紀にかけてカトマンドゥ盆地を支配したマッラ王朝の時代に成立したといわれる(1)。後期のインド仏教，すなわち仏教タントリズム（密教）の伝統を受け継いだネワール仏教はヒンドゥー教との融合をすすめながら，この地に独自の仏教を形成した。そしてこれは，妻帯した司祭カースト，ヴァジャラーチャールヤ Vajrācārya を中心に今日まで維持されてきた。現在のゴルカ王朝はヒンドゥー教を国教と定めるが，なお，10万人程度のネワール仏教徒が自分たちの信仰を守っている。本稿では，彼らが行なっている儀礼に焦点を当ててネワール仏教の特質を浮かび上がらせたい。

儀礼が宗教を構成する重要な要素のひとつであることはいうまでもないが，本来は個人的な救済を志向した仏教もその例外ではない。特に，秘儀性と象徴性を重視したタントリズムの影響が強くみられるネワール仏教では，儀礼の占める割合は大きいといえよう。ネワール仏教の儀礼に関する研究は，これまでもっぱら人類学者たちの手によってなされてきた(2)。ただし，日本では，仏教学，あるいはインド学との関連で，文献学者による研究がいくつか見られる(3)。しかし，いずれもその数はきわめてわずかであり，また実際の儀礼の記述や，あるいは，儀式の手順を規定した儀軌の紹介などに終始し，ネワール仏教の体系的な儀礼研究が行なわれてきたとは言い難い。したがって，現在この分野に必要とされるのは，儀礼の事例のリストを豊富にし，それによって体系的な儀礼研究の足がかりを築くことであると考えられる。ここでは以下，ネワール仏教の代表的な寺院ジャナ・バハ Jana Baha で毎日行なわれている儀礼を紹介し，それをとおして若干の考察を試みる。

2．白観音の寺ジャナ・バハ

ジャナ・バハに関してはすでに J. Locke の詳細な報告書が出版されている［Locke 1980］。同書にもとづいて，儀礼との関連でその沿革，構造，そして寺院の維持組織について概略的に述べておく(4)。

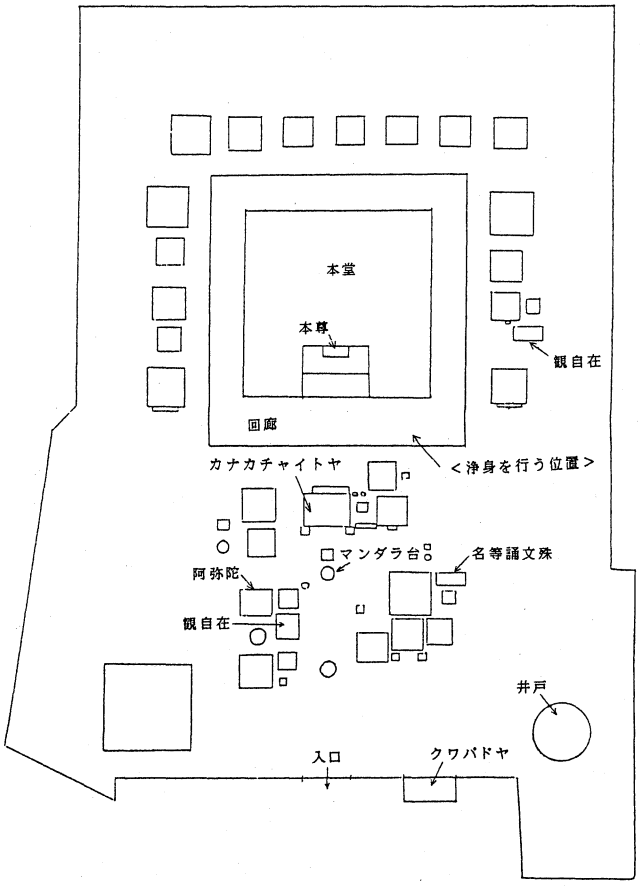


図6　ジャナ・バハ配置図

カトマンドゥの旧市街アサン地区近くに位置するこの寺院は，本来は別々のふたつの寺院セト・マツェンドラナート Seto Matsyendranāth とジャナ・バハからなっている。現在はいずれも寺院全体を指す名称として用いられているが，ここでは Locke にしたがいジャナ・バハという名称を用いる。このうち，セト・マツェンドラナートは本堂にあたる建造物である（図6）。寺院名の「セト」（白）という語は，からだ全体が白く塗られている本尊の観音菩薩に由来する。マツェンドラナートというのは九世紀にこの地に現れたとされる聖者の名で，ナート Nath 信仰と呼ばれるヒンドゥー教のシヴァ派のひとつに属していた[5]。彼にちなんで名付けられたこの寺院は，後に観音信仰と結びつき，カトマンドゥ盆地にある観音の霊場のひとつとして現在は信仰を集めている[6]。方形をした本堂は二層の大きな屋根をいただき，屋根を支える多くの「ほおづえ」にはさまざまな観音の化身が刻まれている。また，本堂一階の壁面には108種類の観音の画像が掛けられ，観音信仰の中心地であることを物語る。本堂の入口は東に面し，扉の回りには豪華な彫刻がほどこされ，また本堂の周囲は回廊が取り囲み，参拝者たちはここを回って本尊への

礼拝を行なう。

一方，狭い意味でのジャナ・バハは本堂と本堂の回りの中庭を包み込むように立つ建物で，本堂よりも古い歴史を持つ。本尊は阿閦仏 Akṣobhya で，東側にあるクワパドヤ（kwapadya）と呼ばれる小部屋に安置されている。また，秘密仏としてチャクラサンヴァラ Cakrasamvara とヴァジュラヴァーラーヒー Vajravārāhī がクワパドヤの二階にまつられているといわれるが，一般の人や外国人には拝観が許されていない[7]。

本堂の回りでジャナ・バハの中庭にあたる部分には数多くのストゥーパ（stūpa; 仏塔）がある。また，ストゥーパにはさまれるように観音や文殊などの尊像を納めた龕や，上部にターラー Tārā などをのせた円柱が立つ。これらの多くは本堂の東側に集められているが，本堂の残りの三方にも一列にストゥーパが並んでいる。これらのストゥーパの中で特に重要な位置を占めているのが，本堂の正面に接するようにおかれたカナカチャイトヤ Kanakacaitya である。これは過去七仏のひとりカナカ Kanaka 仏をまつったストゥーパで，本堂建立以前にすでにジャナ・バハにあったといわれる[8]。ほとんどのストゥーパが比較的歴史の浅い奉献塔であるのに対し，カナカチャイトヤはきわめて古い歴史を持つことが知られる。

ジャナ・バハはヴァジュラーチャールヤとサキャ Sakya というふたつの司祭カーストによって維持され，全体はサンガ（saṅgha; 僧伽）とよばれている。このうち，ヴァジュラーチャールヤは十六の，サキャは二つの部族に分かれ，各部族の男子一名ずつからなる組織が全体を統括している。さらにこの中からさまざまな決定権を持つ三人の長老が選出される。サンガの全構成員は150人程度であるが，部族の比率からもわかるように数の上からはヴァジュラーチャールヤが優勢を占める。サンガのメンバーはグティ（guthi）と呼ばれる一種の講をいくつか構成している。グティはジャナ・バハの重要な祭礼のために形成され，サンガのメンバーは複数のグティに所属している。またサンガ全体によって構成されるグティもある[9]。

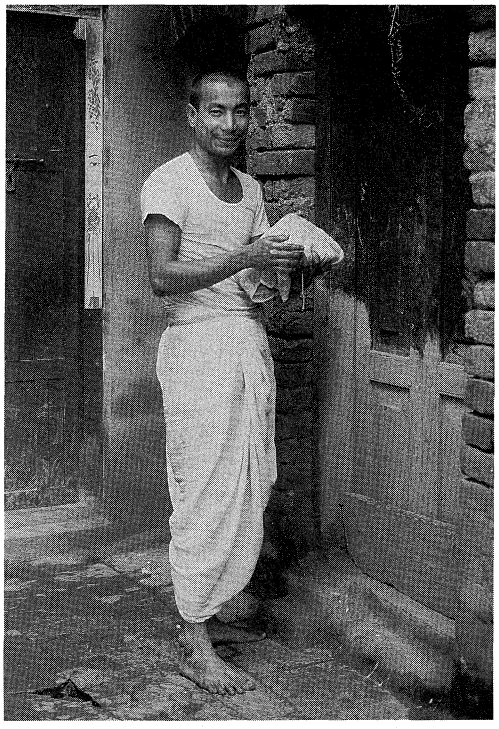


写真84

寺宝の管理や清掃，参拝者の世話などの寺院の雑事はプージャーリ（pūjāri）と呼ばれる住み込みの僧侶によって行なわれる（写真84）。「プージャーリ」はもともとは「供養者」を意味したが，一般にはヒンドゥー教寺院において同種の仕事を行なうバラモンを指す。

ジャナ・バハでは各部族の青年男子がひとりずつ一ヶ月交替でプージャーリをつとめる。次に紹介する日々の供養も彼らによって行なわれる。プージャーリはその任務期間中，本堂の北東でクワパドヤの北に接する一室に寝泊まりし，家族を含む一般の人々との接触を避ける。また，皮革製品などの不浄なものを触れることが禁じられ，食事の内容も制限されている。任務期間の前には数日をかけて周到な準備を行ない，また，一ヶ月間の任務を終えると定められた手続きを経て，次のプージャーリと交替する[10]。

3．ジャナ・バハにおける日常供養

プージャーリによって行なわれる「日常供養」(nityapūjā) は，文字どおりには「常なる供養」であるが，寺院内で毎日定刻に行なわれる儀礼を指す言葉として用いられている。「プージャーリ」という言葉と同様，これも本来はヒンドゥー教寺院でもっぱら使われていた語で[11]，ネワール仏教のヒンドゥー教との融合の結果，定着したものであると考えられる。供養 (pūjā) とは「賓客接待」の形をとった礼拝法である[12]。供養者は賓客を迎えた主人のように供養の対象に水，衣，食事などを差し出す。インドでは，供養は古くよりヒンドゥー教寺院において行われ，仏教徒たちもこれにならい彼ら自身の供養法を確立した[13]。紀元前後の成立と考えられる『八千頌般若経』には「(仏塔に) 花，薫香，香料，花環，塗香，粉香，衣服，傘，幢，鈴，幡を供える」[梶山 1983: 90] と，すでに現在見られる供物の種類がほとんどあげられている。ジャナ・バハで行なわれる日常供養の供物の多くは，一般の信者や参拝者 (写真85) が寄進したものである。プージャーリは彼らに代わってこれらの供物を，本尊をはじめ各尊像やストゥーパに供える。また供え終わった供物の一部は「おさがり」(prasāda) としてプージャーリによって信者たちに与えられる。本堂の中に入り，本尊に直接供養を行なうことのできるのはプージャーリだけであり，一般

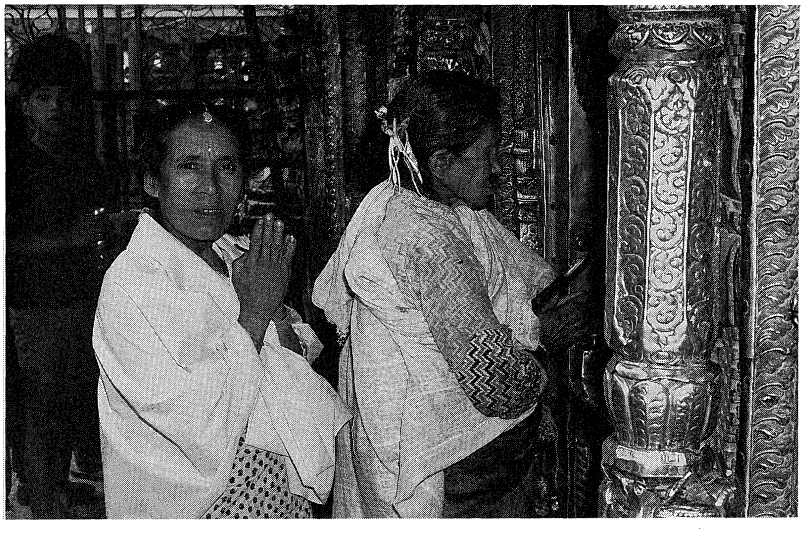


写真85

の信者と礼拝の対象との媒介者としての役割をプージャーリは日常供養において果たしているといえる。

ジャナ・バハではプージャーリによって一日に六回の儀礼が行われる。すなわち，明け方，午前十時，正午，午後四時，日没時，午後十時である。このうち，明け方に寺院の開門，日没時に灯明の点火，午後十時に閉門というように各時間に相応した行為も含まれるが，それ以外の部分はいずれもほとんど共通である。

このうち，十時の儀礼は次のような段階で行なわれる。

A 前半部

A-1 浄身(1)

A-2 撒水・撒米

A-3 本尊の供養(1)

A-4 カナカチャイトヤの右繞

A-5 本堂の右繞

A-6 経典の読誦

A-7 本尊の供養(2)

B 後半部

B-1 浄身(2)

B-2 カナカチャイトヤの供養

B-3 ストゥーパの供養

B-4 尊像の供養

B-5 マンダラ台の供養

B-6 浄身(3)

以下，写真を中心に午前十時の儀礼を紹介する。

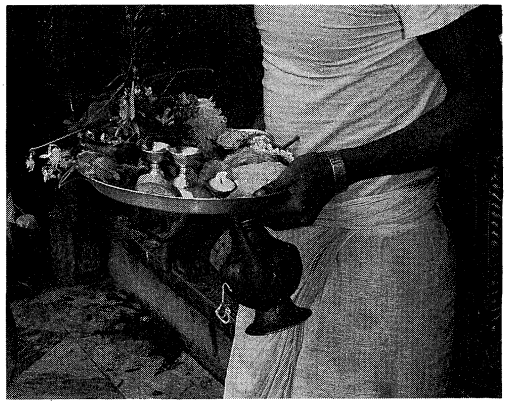


写真86

i．　供養盆，水瓶

供養盆は直径約３０センチ・メートル，深さ約３センチ・メートルの真鍮製の容器である。水以外の供物はすべてこの上に載せられる。水瓶も真鍮製で，中の水は境内の北東にある井戸で汲まれる。

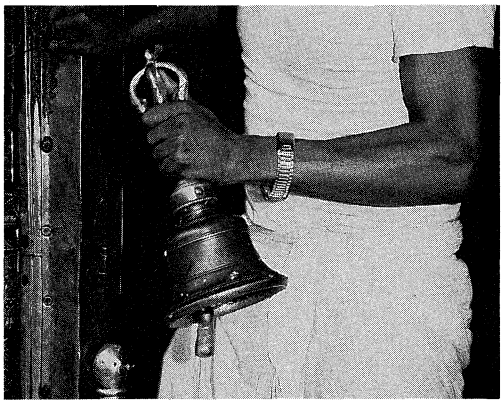


写真87

ii．　金剛鈴

上部は五鈷になっており，形態や材質は日本やチベットにおける金剛鈴と同じであるが，大きさはそれらよりも一回り大きい。使用の際は左手で保持される。

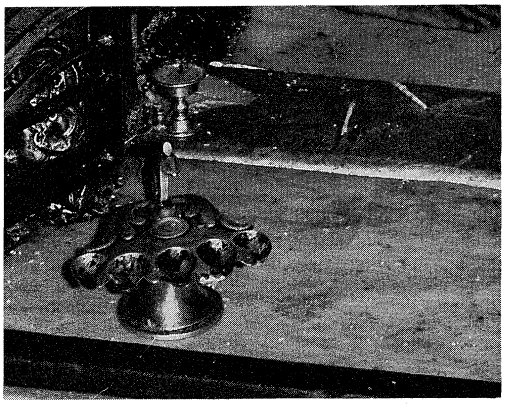


写真88

iii．灯明台

扇型をした盤に把手と台が付いている。扇型の弧の部分に五つのくぼみがあり，動物性の油の中に灯芯が浸される。

写真86—88　日常供養において用いられる道具

A. 前半部

A-1 浄身(1)

水によってプージャーリは，まず手と口を，そして頭と腕を浄める。浄めた後は他人との接触を避ける。左手に持つ真鍮の水瓶は浄身用のもので，水は境内の井戸から汲む。 [10:07]

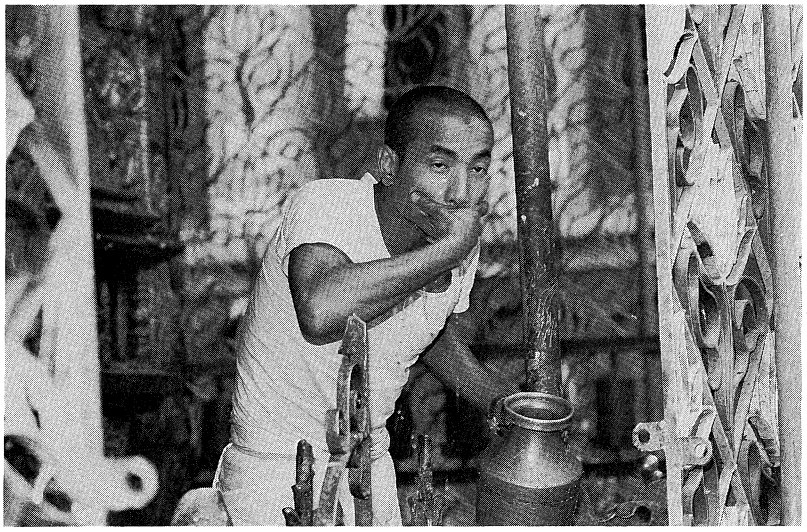
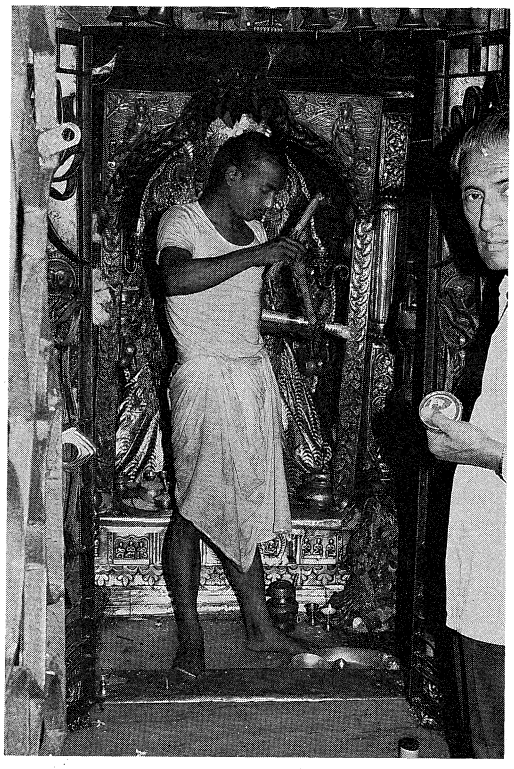


写真89

A-2 撒水・撒米

プージャーリは右手に米粒を握り，左手に水瓶を持ち，境内の六カ所（クワパドヤ，内庭の入口，観自在，阿弥陀，カナカチャイトヤ，本堂入口のそれぞれの前）で米と水を撒く。水は，水瓶を右回りに回し，三つの円を描くように撒かれ，プージャーリによれば，この三つの円は仏，法，僧の三宝を表すという。 [10:08]

写真90



A-3-1 本尊の供養(1)〈香〉

本堂の中に入り，本尊の供養を行なう。供養の内容は，順に花，香，称名，灯明，音楽，香と鈴である。このうち，音楽は，本尊の左手に釣り下げられた鐘をならす。灯明は灯明台（写真88）を用いて本尊の顔の前に差し出す。写真は線香を取り出しているところである。 [10:12]

写真91

A-3-2 本尊の供養(2)〈称名〉

本尊の右手に立ち，本尊の観自在を称賛する内容を持つサンスクリットの偈文を唱える。[10:13]

写真92

A-4 カナカチャイトヤの右繞

プージャーリは右手には火のついた線香を，左手には金剛鈴（写真87）を持ち，本堂から出てカナカチャイトヤを含む仏塔群を三周，右回りに回る。回るときには金剛鈴を鳴らしながら，一周目には「オーン，仏陀に帰依する」，以下，二周目には法に，三周目には僧に帰依すると唱え，三周することによって三宝への帰依を示す。 [10:16]

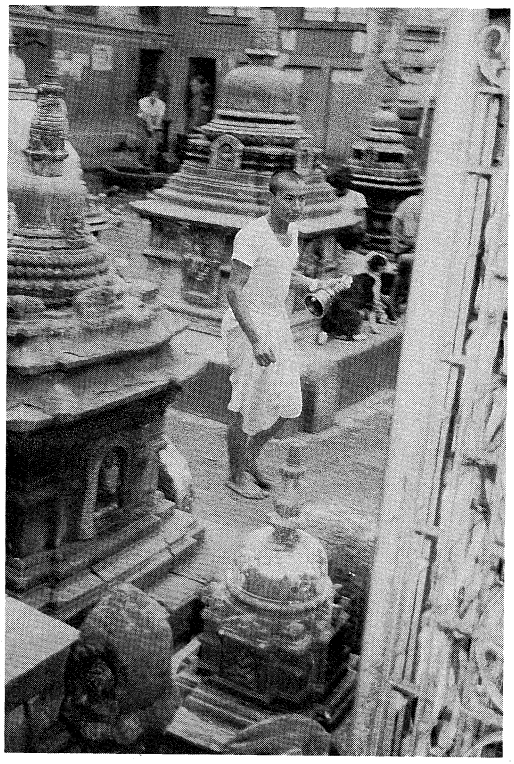


写真93

A-5 本堂の右繞

カナカチャイトヤに続き本堂の回廊を右繞する。この場合，右繞の回数は一度だけである。

[10:17]

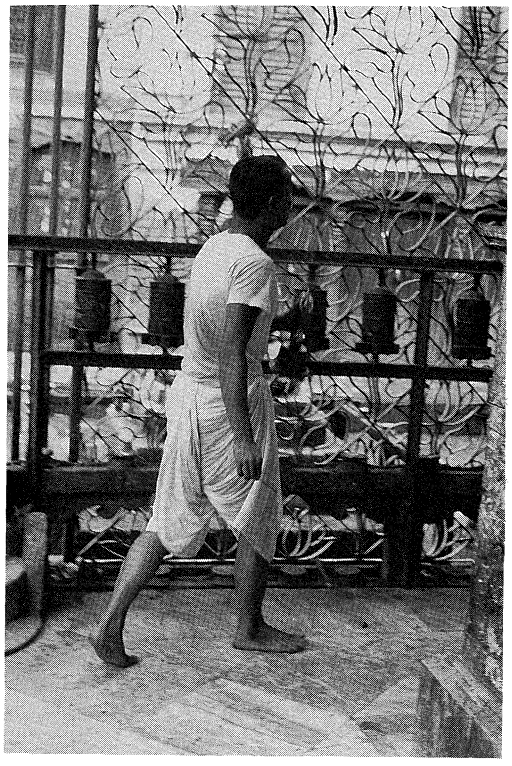
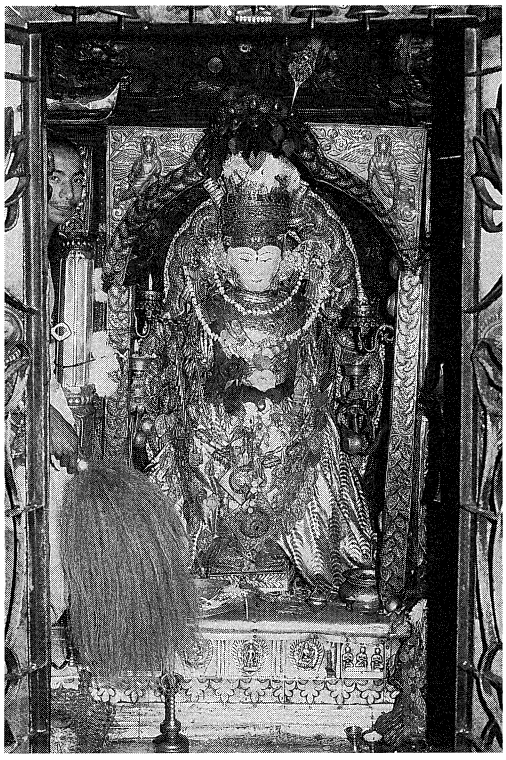


写真94

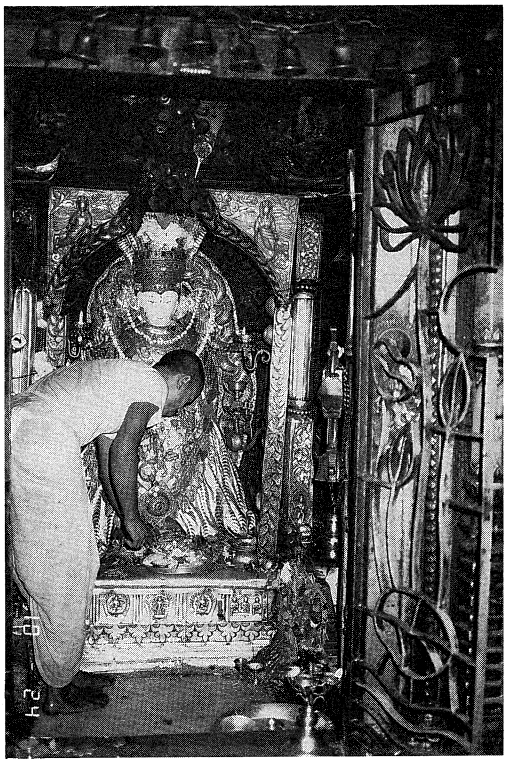


A-6 経典の読誦

再び本堂に入り本尊の右手に立ち，経典を読誦する。右手には払子を持ち，天井から鎖で釣り下げられた鈴を左手で鳴らす。一日に行なわれる六回の日常供養では，それぞれ異なった経典が本尊に対して読誦されるが，十時の場合は『聖観自在の御姿の称讃』 *Aryāvalokiteśvararūpastavastotra* [Locke 1980: 455-8] と呼ばれる経典である。

[10:20]

写真95



A-7-1 本尊の供養(2)〈花〉

本尊の前を掃き清め，花と米，そして五甘露 (pañca-amṛta) と呼ばれる牛乳，ギー，蜜，砂糖水，ヨーグルトを供物として本尊に供える。写真は米を供えているところである [10:24]

写真96

A-7-2 本尊の供養(2)〈誓願〉

これより前半部の終わりまでは，カトマンドゥ市で最も一般的に行なわれている供養法，グルマンダラプージャー（師曼荼羅供養）の一部が行なわれる。この儀礼は『グルマンダラ・アルチャナプージャー』*Gurumaṇḍala-arcanapūjā* という儀軌に基づいており，同書によれば，この場合のグルとは金剛薩埵のことである。この儀礼の後半部は金剛薩埵への供養であり，それがここではそのまま本尊への供養に用いられている。プージャーリはまず，眼前に諸仏を招へいし，これより供養を行なう趣旨の誓願の偈を唱える。 [10:24]

写真97

A-7-3 本尊の供養(2)〈灯明〉

グルマンダラプージャーの供養の内容と順序は，香，水，シンドゥール（赤色の塗香），衣，花，食物，牛乳，果実，灯明，炒り米，水と花を伴った炒り米，そして再び，炒り米である。供物を供えるときには，各供物ごとに決められた言葉が唱えられる。最後に金剛薩埵を称える百字からなる言葉（百字真言）を唱えて本尊の供養を終え，同時に日常儀礼の前半部を終了する。写真は本尊の顔の前で火のついた灯明台を揺らし，灯火によって本尊を供養しているところである。 [10:25]

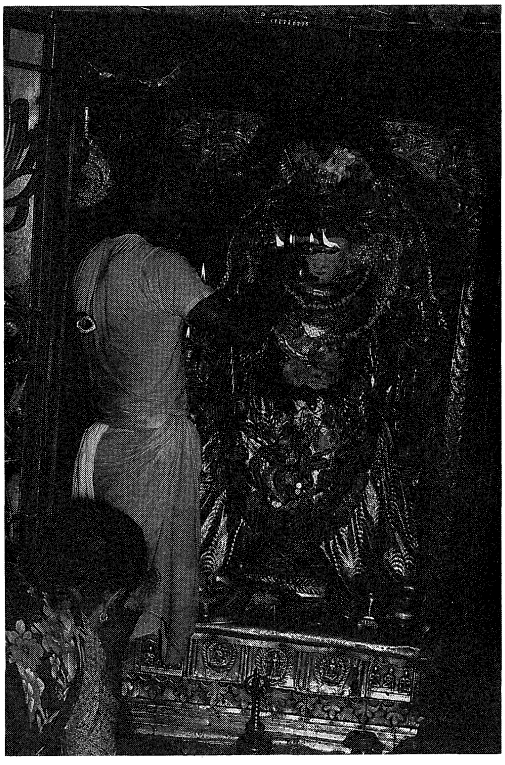


写真98

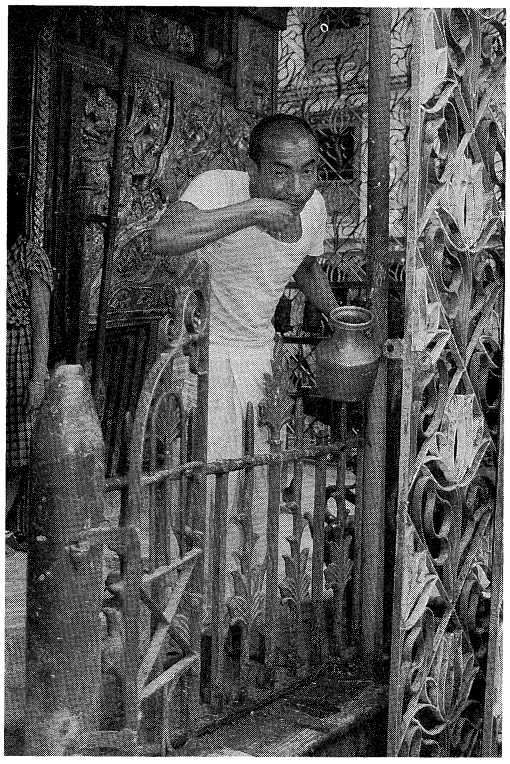


写真99

B. 後半部

B-1　浄身(2)

本堂から外にでて，浄身を行なう。方法はA－1と同じである。十時に開始された日常儀礼の全体がこの行為によって二分される。　[10:28]

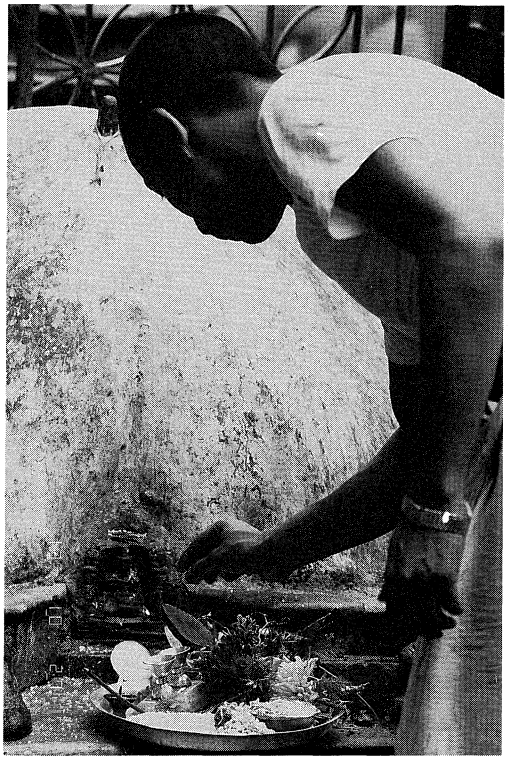


写真100

B-2-1

カナカチャイトヤの供養(1)〈花〉

浄身を終えた後，プージャーリはいったん，本堂の中に入り，手に供養盆と水瓶を持って出てくる(写真86)。そして，カナカチャイトヤの前（南側）に立ち，覆鉢の宝生如来に対し供物を次々と差し出す。最後に合掌して，プージャーリは次の供養の対象である本堂東南のストゥーパに移動する。　[10:31]

B-2-2
カナカチャイトヤの供養(2)〈灯明〉

灯明による供養であるが,本尊の場合と異なり,灯明台は用いず,火のついた素焼の小さな燭台を宝生の近くに置き,そこから木製の灯芯に火を移し,宝生の前に差し出す。 [10:33]

写真101

B-3 ストゥーパの供養

本堂の南,西,北の三方に位置するストゥーパに対し供物を供える。供養はストゥーパの覆鉢にある四仏のうちの一尊に対して行なうのであるが,プージャーリは本堂とストゥーパを右手にして右回りに移動するため,南のストゥーパの場合,南の宝生,西では阿弥陀,北では不空成就に対して供養を行なう。供物の内容は「カナカチャイトヤの供養」の時と同じである。写真は花を供えているところである。 [10:38]

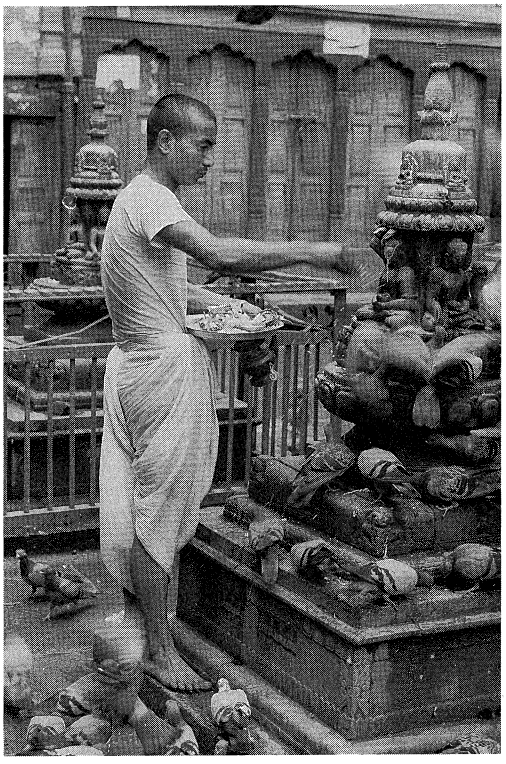
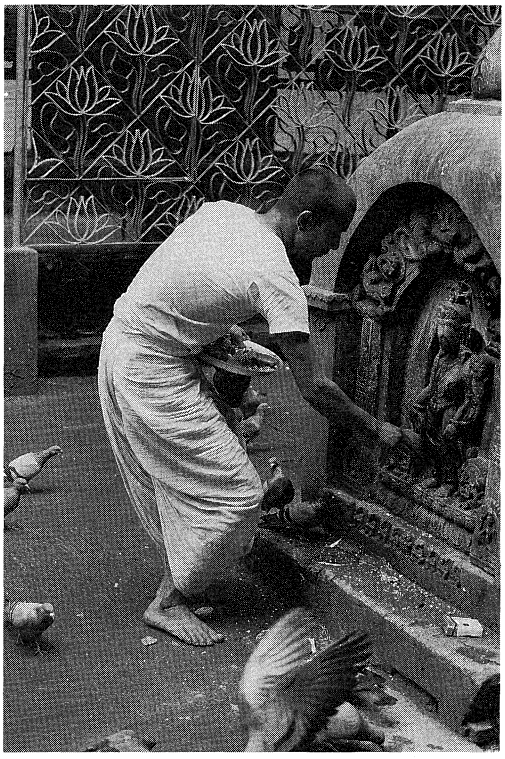


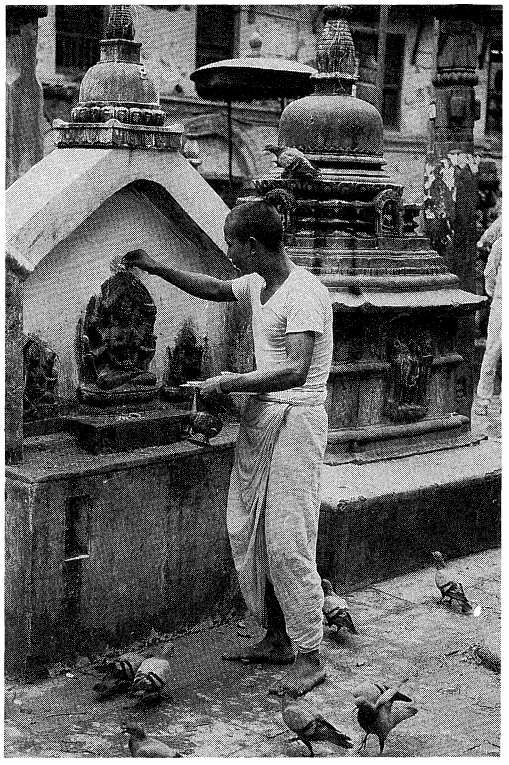
写真102



B-4-1　尊像の供養(1)〈観自在〉

本堂の三方のストゥーパの供養に続き，龕の中の尊像と本堂の正面にあるストゥーパの一部に対して供物を供える。内容，方法はこれまでのストゥーパに対する供養とまったく同じである。写真は観自在の立像に対する供養である。　[10:40]

写真103



B-4-2　尊像の供養(2)〈文殊〉

同じく尊像に対する供養で，対象は名等誦文殊 Nāmasaṃgītimañjuśrī である。両脇侍のターラー Tārā とヴァスダラー Vasudharā に対しては供養は行なわない。写真は花を供えているところである。　[10:41]

写真104

B-4-3　尊像の供養(3)〈クワパドヤ〉

クワパドヤの前に立ち供物を供えるのであるが，供養の対象はクワパドヤ内の尊像である。プージャーリは門は開けずに，A-2「撒水・撒米」を行った時と同じ場所に供物を落とす。そのため，尊像に直接塗布されるシンドゥールは省略される。また，水もバリの時と同じように三つの円を描くように撒かれる。　[10:43]

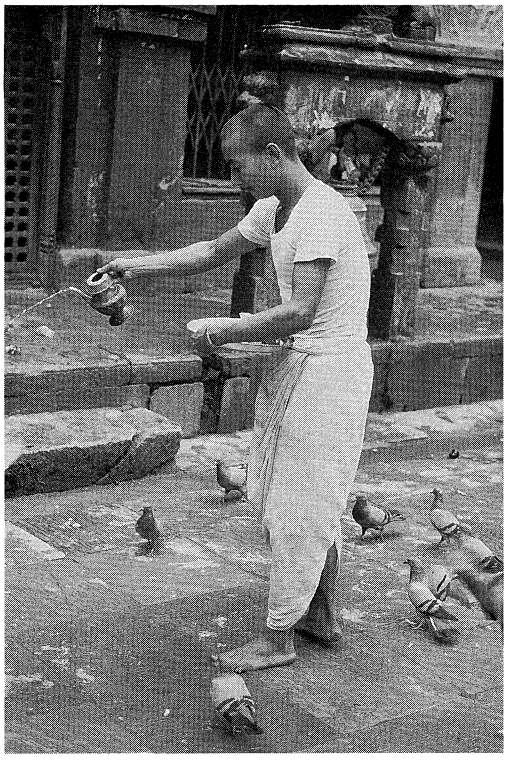


写真105

B-4-4 尊像の供養(4)〈阿弥陀〉

阿弥陀如来坐像に供物を供える。内容，方法はストゥーパの供養と同じであり，写真はシンドゥールを塗っているところである。背後の女性は参拝者である。　[10:44]

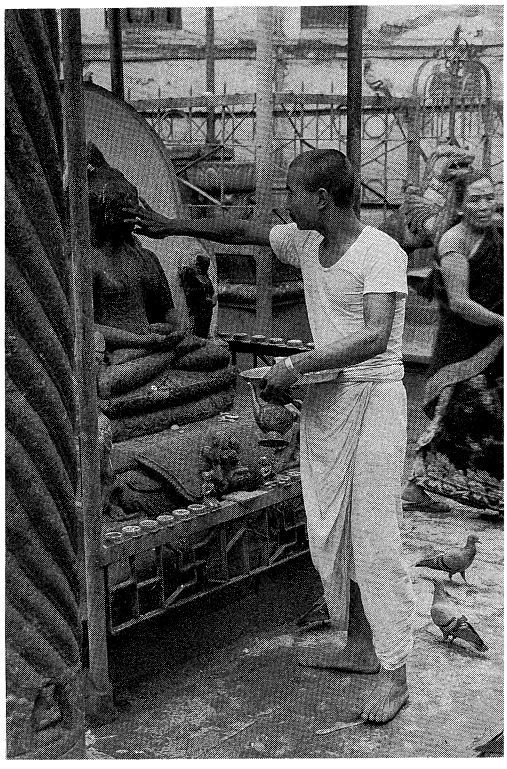


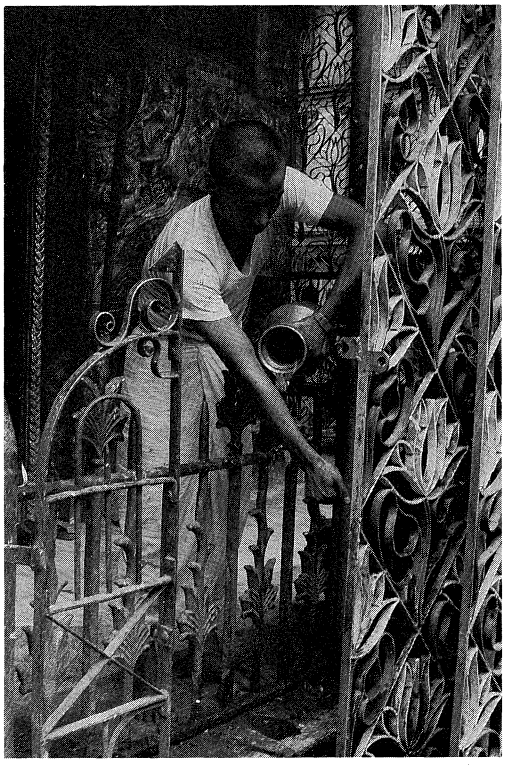
写真106

B-5 マンダラ台の供養

一連の供養の最後に，本堂の正面，カナカチャイトヤのすぐ近くにあるマンダラ台に供物を供える。供物をひととおり供えた後，供養盆に残った米粒や花などの供物はすべてここに落とされる。写真は米を供えようとしているとこである。

[10:45]

写真107



B-6 浄身(3)

ストゥーパ，尊像などの供養を終えた後，三度目の浄身を所定の位置で行なう。方法はA-1, B-1の時とまったく同じである。これは，十時の日常儀礼の終了を意味している。 [10:46]

写真108

4．考　察

以上，見てきたように十時の儀礼はおよそ40分間にわたって行なわれたが，全体は，いくつかの基本的な行為によって構成されている。儀礼のこれらの構成要素について，意味や機能，それぞれの起源，あるいは各要素間の関連について考えてみる。

全体を通して最も多くみられる行為は供養である（A-3, A-7, B-2～5）。特にA-7「本尊の供養(2)」は供えられる供物の種類や供養にかける時間からみても十時の儀礼の中心的な位置を占める。ここで行なわれる供養は前節でも述べたように「グルマンダラプージャー」(gurumaṇḍalapūjā）と呼ばれるカトマンドゥで最も一般的な供養法である[14]。一方，後半部で行なわれる供養は「五種供養」(pañcopacārapūjā）という名で知られる供養法である[15]。五種供養法には長短二つの方法があり，カナカチャイトヤには長い五種供養が，それ以外のものにはすべて短い五種供養が行なわれる。五種とは花，線香，灯明，香（シンドゥールで代用），食物であり[16]，これらを供えるときに唱えられるマントラの長さの違いによって二種の五種供養が区別されるといわれる。すでに述べたように供養はインドで広く行なわれる礼拝方法で，グルマンダラプージャーや五種供養で供えられる供物も，ヒンドゥー教の寺院でみられる供物と共通している。しかし，グルマンダラプージャーが，本来は仏教タントリズムの代表的な尊格である金剛薩埵への供養であることや，いずれの供養においても供物を供えるときに唱えられるマントラが「金剛」(vajra）の語などを含む仏教独自のものであることから，これらの直接の祖型はインド後期の仏教タントリズムに求められる。しかし，「グルマンダラプージャー」や「五種供養」の名そのものは，当時の文献には見いだすことはできず，おそらく，ネパールで現在の形に整備されたのであろう。

供養の次にしばしば行なわれる行為は右繞（pradakṣiṇa）である。右繞はネパールやチベットを含む南アジアにおいて広範に行なわれている礼拝方法で，礼拝者は崇拝の対象が常に自分自身の右側にくるように時計回りに回る。インドでは，右繞の対象となるのは王や貴人，尊者など清浄，吉祥なるものであり，それに対し，不浄，邪悪なものには逆の左繞（prasavya）を行なう[17]。仏教の場合，仏陀に対する右繞の他に，早くからストゥーパの右繞がみられる。十時の儀礼ではA-4「カナカチャイトヤの右繞」，A-5「本堂の右繞」の他にさらに二回の右繞が行なわれている。まず，A-2「撒水・撒米」でプージャーリは中庭の六箇所で水と米を撒き，本堂正面のストゥーパ群を右周りに回っている。また，後半部では五種供養を繰り返しながら，カナカチャイトヤから始まりマンダラ台で終わる，本堂と中庭全体を包み込む大きな円をプージャーリは描く（図２）。右繞を行なう場合，円運動の中心に礼拝の対象が位置するが，十時の儀礼の場合，本堂――厳密に言えば本尊――とカナカチャイトヤの二つがこれにあたると考えられる。

十時の儀礼では浄身（ācamana）が三回行なわれるが（A-1, B-1, B-6），そのうちの二回が全体の前後に行なわれていることから，これが日常供養の前後の区切りとなっていることがわかる。浄身がこのようになんらかの儀礼行為の節目として行なわれるのは，水の持つ浄化機能にもとづ

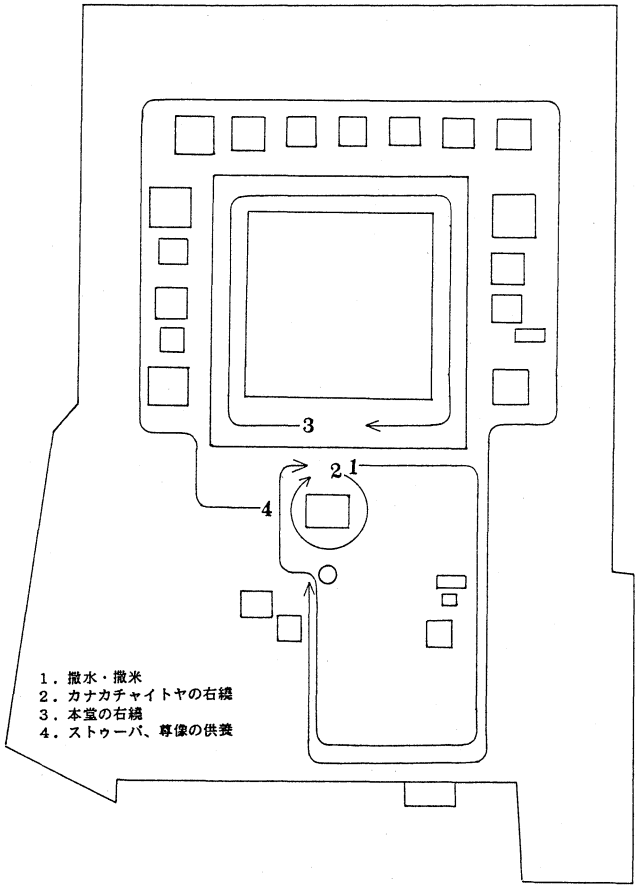


図7　日常供養におけるプージャーリの動き
（供養の対象とならないストゥーパなどは省略した）

き，この行為を儀礼の時間とそれ以外の時間との間の境界に置いたためである。このような水による身体の浄化という行為も，古くよりインドにおいてみられる。『マヌ法典』[田辺 1953: 48-49]や『ヤージュニャヴァルキヤ法典』[中野 1950: 5-6] では浄身の方法が詳細に規定されている。また，現在のヒンドゥー教の儀礼においても浄身は諸儀礼間の区切りに置かれている(18)。ジャナ・バハの日常供養ではさらに全体の中間あたりにも浄身が置かれているが，これは，主に本堂内で本尊の供養を行なう前半部と，中庭でストゥーパや尊像への五種供養を繰り返す後半部との区切りを示すと考えられる。

一回目の浄身の次に行なわれるA-2「撒水・撒米」はバリ (bali) と呼ばれる儀礼である(19)。バリもインド起源の儀礼であり，古くより民衆の間で行なわれてきた。本来は，低位の神がみや悪霊などに対して食物を捧げて彼らの慰撫と保護を求める儀礼で，動物の供犠を行ないその肉や血などを撒いて祈願した(20)。バリと供養ははやくから混同され，香や花環，灯明のような供養の代表的な供物がバリの名のもとで供えられた(21)。A-2における供物は米と水であり，儀礼の執

行を妨げる悪鬼（障礙）[22]に対して，儀礼全体がとどこおりなく終了するようにプージャーリは祈願する。米と水は後に行なわれる本尊やストゥーパの供養にも含まれるが，ここでは米は供養盆に盛らずにプージャーリが直接手に握り，また，特定の対象に差し出すのではなく地面に撒き散らすなど，供養との相違が認められる。ただし，水は三つの円を描くように撒かれ，プージャーリによればこの三つの円は仏，法，僧の三宝を象徴し，仏教的な意味付けがなされていることが知られる。

5．結　語

浄身によって前後を区切られたジャナ・バハの日常供養は「本尊の供養」と「カナカチャイトヤの供養」という二つの供養を中心とする複数の行為からなる儀礼である。これら二つの供養の対象は，同時にジャナ・バハの空間的な中心であり，右繞の場合の中心にも一致する。ジャナ・バハの日常供養がこのような二つの中心を持つのは，ジャナ・バハが，セト・マツェンドラナートと狭義のジャナ・バハという本来別々の二つの寺院の複合体であることによると考えられる。しかし，両者の間では本尊の白観音の方がカナカチャイトヤよりも優位にあることは，後半部の行為がストゥーパなどの供養を繰り返しながら本堂を右繞し，カナカチャイトヤもこの右繞の一部分――ただし他の部分よりは重要性を持つが――をなしていることからも明らかである。このことは，本尊の供養がカナカチャイトヤの供養に比べ，供物の内容も豊富であり，必要とする時間もはるかに長いことによっても裏付けられる。

日常供養を構成する個々の行為――供養，右繞，浄身，撒水・撒米――はいずれもインドに起源を持ち，ネワール仏教の儀礼がインドという広大な文化圏の影響を強く受けたことを示している。今後，カトマンドゥの他の仏教寺院やヒンドゥー教寺院，また，インドのヒンドゥー教寺院において行なわれている同種の日常供養との比較を行なうことによって，ネワール仏教の儀礼の持つ普遍性と特殊性がさらに明確になるであろう。

註

（1）［立川 1987: 16-17］
（2）［Brough 1948］［Slusser 1982］［Anderson 1971］［Gutschow 1982］［Locke 1980］などがある。
（3）［氏家 1973, 1974］［島 1984, 1985］［高岡 1984］［立川 1984］などがある。
（4）ジャナ・バハに関しては，この他に［Snellgrove 1961: 104-109］［Wiesner 1987: 28-29］［Locke 1985: 30］［立川 1987: 62-69］参照。
（5）マツェンドラナートとナート信仰については［Locke 1980: 418-431］参照。
（6）ジャナ・バハの詳しい歴史については［Locke 1980: 147-167］参照。
（7）［Locke 1980: 14-15］
（8）［Locke 1980: 149］
（9）［Locke 1980: 169-175］

(10) [Locke 1980: 175-176]

(11) ヒンドゥー教寺院における日常供養については［井狩 1984: 120-122］参照。

(12) ヒンドゥー教の供養法については［松原 1967: 328-330］参照。なお，ヒンドゥー教では後に供養法は「十六種供養」と呼ばれる形に整備された。これについては［Tachikawa 1983］参照。

(13) インド密教の学僧，アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta（11-12世紀）が著した儀軌『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* には，尊像に対する供養の方法，供養の種類とその意味が述べられている［Abhayākaragupta 1957: 82,5,6-83,2,5］。

(14) グルマンダラプージャーについては［高岡 1984: 101-105］参照。グルマンダラプージャーは儀軌が出版されており［Vajrācārya-saṅgha 1062］，プージャーリもこれを用いていた。同書には和訳［氏家 1974］がある。

(15) 五種供養については［Locke 1980: 76-78］参照。

(16) 五種の内容については別の説もある［島 1984: 90］。

(17) ［杉本 1984: 88, 224, 308-309］［宮治 1979: 98-99］

(18) ［井狩 1986: 120-125］ 浄身の持つこのような役割は［井狩 1986: 128］においても指摘されている。また，ヒンドゥー教における浄身の具体的な方法については［Vidyārṇava 1974: 13-15］参照。

(19) バリについては［片山 1974, 1975］［奈良 1975］参照。

(20) ［奈良 1975: 100-102］

(21) ［奈良 1975: 130］

(22) 障礙については［トゥッチ 1984: 98-99］参照。

付記 第四章で使用した写真は，1987年7月17日に撮影したものである。写真撮影を快諾され，筆者の質問にも答えていただいた当日のプージャーリ Minduratna Vajrācārya 氏に謝意を表します。